
パラダイム—The world which is in a state of flux—

樋口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

円環パラダイムーThe world which is in
a state of fluxー

【Nコード】

N5513Z

【作者名】

樋口

【あらすじ】

人のように考え、人のように動き、自律成長プロトコルにより精神の成長を可能とする、高度な人工知能の実現すら叶う時代。二十二歳という若さで名だたる著名画家の仲間入りを果たした詩歌の元に、ある日身に覚えのない荷物が届く。送り主の分からない怪しげな荷物を訝りつつも、閉塞した気分が紛れるならと一時の酔狂に身を委ね、開封して調べてみることに決める。

果たして、中に入っていたのは用途の不明な機器と、一枚の紙片であつた。

これだけでは掴めない。

詩歌は機器の特徴ある形状と紙片に書かれた文字を頼りに、次世代のマルチメディアプレイヤーとして普及している『CCEI』での検索を試みる。

そうして表示されたのは、膨大な数の検索結果。

その中で一際目を引く“電子世界公式情報サービス”というページを覗き、概要説明文にあつた『新しい世界』というフレーズに惹かれた詩歌は、数多ある他のホームページに目を通してから規定の手順に従い、電子世界と呼ばれる未知の領域へ飛び込む。

姿形と性別を、男性と偽って。

そしてそこで出会つた少女に言われる。

「君はどうして人を見ないの？　せかせかと動いて、まるで人目が合わないようにしているみたい」

思いもよらない言葉をかけられ、詩歌は戸惑う。

逃げ込んだ世界の果てで詩歌が見るものとは？

近未来と偽物の世界。機械万能の時代が織り成す空想劇。

第一章“幸せの絵画”一話（前書き）

はじめまして、作者の樋口と申します。

この作品は一見SF風味ですが、ファンタジー作品として読んでいただけたらと考えています。

さて、ここの作品機能を使ってプロットや構想、詳細な設定を書き留めているのですが、どうにも編集に不慣れで構想の一部が公開設定になってしまっています。

度々やってしまうかもしれない、と書いた矢先から一話を丸々消してしまいました。

バックアップを取っておくべきでしたね……小説置換、恐るべし。書き直しているあいだ、二話だけの掲載になってしまいご迷惑をおかけしました。

拙作をお楽しみ頂けると幸いです。

第一章“幸せの絵画”一話

「ねえ、いるんでしょう？」

玄関の向こうから聞き慣れた声が届く。

その声を努めて聞き流しながら、詩歌は戸を隔てた玄関の床で毛布にくるまり、胎児のように丸くなっていた。

白皙の肌に煌めく漆黒の虹彩。

夜空を写し取ったかのような、紫味のある黒い髪をした詩歌は、しかし顔に拭い切れない陰が見て取れる。

「ちよつと！　ここ開けなさいよ！」

やけに通る怒声と共に戸を叩く音が飛び込んできて、室外の喧騒に詩歌は思わず「うるさい」と口にしてしまう。

少し前から会っても生返事しかせず、最近になって会おうとすらしなくなっていたからか、彼女の反応は顕著だった。　一際大きく詩歌の名を呼ぶと、太鼓を思わせる速さでひっきりなしに戸を叩き始める。

しかし、それも長くは続かなかった。

詩歌の貫徹した無視に、もう反応を返すつもりがないと悟ったのか、やがて場は静まり返る。

怖いくらいの静寂が満ちる中、詩歌は後ろめたい思いで嵐が過ぎ去るのを待っていた。

怖かった。

彼女が善意から来てくれているのだと知っていても、気心の知れた友人である彼女が相手だとしても、詩歌は誰かと向き合つのを恐れていた。

「何で会ってもくれないのよ……」

嘆くような、悲しむような呟きを聞いた時、玄関の向こうで苦虫を噛み潰すようにしている彼女が目に見えようだった。

そんな呟きだけを残して彼女は去っていく。石畳に立つ硬

質な足音が早く遠ざかるように祈りながら、詩歌は一言「ごめんね……」と漏らした。

足音が完全に聞こえなくなると、詩歌はくるまっていた毛布から這い出し、玄関扉に付いた郵便受けから外の様子を窺う。

本当に誰もいなくなったか念を入れるためだ。

自分でも笑えるくらい神経質な行動に、嘲笑いが零れる。

いなくなっただけだと思わせて油断を誘う。

彼女がそんな真似をするはずなんてないと分かっているのに。

詩歌は自らが住むマンションの一室を見渡す。

殺風景な部屋だ。高層建築の粋を凝らして建てられたこのマンションは広く、十人でも易々と暮らしていけそうなのに家具は必要最低限に留まっている。

古臭いブラウン管のテレビに、寝具とクローゼット、申し訳程度にソファがあるくらい。

詩歌はこのマンションが好きではなかった。

生きていくのに必要なくらい広い部屋も、庶人を寄せつけない格調高い外観も、息が詰まってしまうことになることはあれど、喜んだことはない。

倦怠感を打ち払うように頭を左右に振り、重い足取りで居間に向かつて歩く。

このマンションは著名な画家として恥ずかしくない家に住むべきだと、父親に厳しく言いつけられ、母親にやんわりと強制された結果だった。

インテリアにまで口出しされないのは誰かを招く必要なんてなく、このマンションに住んでいるという体裁さえ保てれば十分だと判断されたからだろうか。

招かないのは人付き合いに支障を来すかもしれないが、そもそも誰かを招くつもりなんて毛頭ない自分に、譲歩してくれたのだと思う。

益体もないことを考えているうちに、居間の前まで辿り着いていた。

詩歌はこれまた高級そうな扉を開き、中に入っていく。

目指す先は片隅にある油絵用の画布だった。

脚立で支えられたキャンバスの前に立ち、被せてある布を乱暴に取り払う。

布が床に落ちる音を聞きながら、詩歌は晒されたキャンバスの画面に目を凝らす。そこには、完成した『作品』が描かれていた。

小さな頃から、絵を描くのが好きだった。

家族が笑い合って過ごす光景も、怯えたように距離を置く妹と仲睦まじく遊ぶ場面も、切望し手に入れられなかった幸せを、平面上になら幾らでも生み出せる。

それは仮初めと称すのも烏滸がましい虚構の幸せだったけれど、当時、孤独に潰されそうだった自分を絶望の淵から救い出してくれたのも確かだった。

だけど、今は……。

目の前にある『作品』を見つめ直す。

テーマは『悲劇』。

長い時間をかけて二人の間に横たわるしがらみを乗り越え、手を取り合うことができた兄弟に襲いかかった不幸。

兄は祖国を侵略せしめんとする異国の大軍の前に立ちほだかり、軍人として、兄として、また一人の人間として、愛する祖国と弟、幼い頃のように純粋な気持ちで弟と笑い合える未来をも守ろうとする。

死地に次ぐ死地を潜り抜け、遂には祖国を勝利に導き凱旋する兄であったが、兄の心変わりを知った王は自らの犯した所業が白日の下に晒されるのを恐れ、凱旋の騒ぎに乗じて兄を弓矢で射抜く。

王に忠誠を誓い、墓の下まで秘密を持っていくと心に決めていた兄は何本もの矢を胸に受け、嘆き悲しむ。

忠誠を疑われた不実と、何より失われた弟との未来に。

ざわめく民衆と、慌てて駆け寄ってくる弟に手を伸ばし、睫毛を濡らして悲哀に叫ぶ兄の姿を写實的に描いたのがこの絵だ。

そう、悲劇だった。

自分に『悲劇』や『惨劇』を描き出す才があると知ったのはいつだったろう。

作られた『幸福』を一枚、また一枚と描き、大きくなるにつれて、絵が嫌いになっていった。

幾ら『幸福』を描き出そうと現実には何ら影響を与えず、素っ気なくあしらわれ、優しいようで中身の籠っていない言葉をかけられ、くぐもった悲鳴を上げて後ずさられる。

虚実に過ぎないのだと思い知らされる。

それでも『幸福』を描くのはやめられなかった。見たことのない父の、母の、妹の心から笑った顔はどんな感じだろうかと想像を膨らます。

かつての自分はそれだけで幸せな気持ちになれて、何度も頬を緩ませた。

そんな子供時代からもう何年経っただろうか。
今は絵が好きなと同じくらい、絵が嫌いになっていた。

「わたしは何をしてるんだろう……」

シミ一つない真っ白な天井を見上げ独白して、しかしすぐに仕事だと気づく。

そう、絵を描かなければいけない。

明日には次の『悲劇』を描くための画材が届く。

益のない感傷に浸っている暇はないのだ。

そう自分に言い聞かせて、明日の『作業』に備えて準備を進めていく。

準備しているあいだ、先程口にした独り言が頭から離れることはなかった。

第一章“幸せの絵画”二話

画材が到着する日、詩歌は朝から憂鬱な気分でリビングに寝そべっていた。

ガラス張りの窓からどんよりと曇っている空が見えて、気持ちの沈みに拍車をかける。

今ばかりは嫌いなリビングも気にならない。

原因は一本の電話だった。

『近々、お前の伴侶となるに相応しい男を紹介する』

父からの言だ。

やたらと話が長かったけれど、簡潔にまとめるとこの一点に凝縮されるのだろう。

後は振る舞いについての叱咤と、言葉面をなぞる程度の激励。

この二つのやり取りは毎回と言っていいほどあって、半ばルーティン化しているので然程重要ではない。 てつきり、今回も決まり切った話をするものとはばかり思っていた。

……あと、いつもと違う言葉が交わされることにほんの少しの期待も。

電話が終わった今、詩歌の気分はどん底だった。

悪い意味で裏切られた期待。

紹介するだけ、とは言っても、父の中で婚約は既に決定事項なのだろう。

式の日取りも式場も、果てはウェディングドレスや参列者の選定すら始まっているのだと確信できた。

違うとすれば神前式かもしれないというくらい。

昔からそうだった。

父は恐ろしいまでに玄人主義を信奉する人で、選良という枠から外れることを酷く嫌う。

娘である自分をよかれと思う方へ牽引し、同時に父の社会的立場を揺らがせない保険ともする、徹底した合理精神の持ち主でもある。

進路に関することは父が取り決め、自分はそれに唯々諾々と従うだけでいい。

父は心の底からそう考えているのだ。

まだ小さかった頃から、父は必要以上の関心を自分に寄せなかった。

いつも念頭にあるのは、如何に下手な振る舞いをさせないかであつて、意思は二の次だった。

医者や弁護士、学者に議員、実業家など、政財界や法曹界、多様な分野において、辣腕の人間ばかりを生み出す織倉の血筋。

そこにあつて、自分は一人前と認められていないのだと、かつての詩歌は考えた。

絵の世界でなければ、商社の役員にでもなっていたらろう。

しかし描画の才があると知り、中でも『悲劇』や『惨劇』を表現する適性は類い稀であると気づいた時、詩歌は『幸福』を描くことをやめた。

ひたすらに『悲劇』や『惨劇』の絵を描き、才に磨きをかけ、その末に描いた絵で名誉ある賞を受賞した日、父から本邸に来るよと言われた。

狂喜した。

いつもなら電話の口頭で済ませるのに、今日は直接会うと言うのだ。

今にも踊り出しそうな心を必死で抑え、自然と弾む声で了承する。

これで父に認めてもらえる。

いつもは威圧的に映る本邸が、その日は快く迎えてくれているように見えた。そして、急ぎ本邸に向かった先で言い渡されたのは、転居を促す遠回しの命令と、立ち居振舞いに一層気を配るよう念を押す言葉。それだけだった。

肩を落として消沈する帰り道、考えたのは、もつとたくさんの結果を示さなければいけない。

そうすれば、いつかきつと認めてもらえる。

そう、自分に言い聞かせた。

それから今に至るまで、精進を心がけて幾つもの栄えある賞を獲り。

経歴にそれらが積み重なるのと同じ数だけ落胆して。

今や、国内外にその名を轟かせていると自負してもいいほどになった。

なつて、しまった。

床に華奢な身体を投げ出したまま、詩歌は自分の肩を抱く。

結局、自分はどこまでいっても、都合の良い人形でしかないのだろうか。

視界に入っているフローリングの若木色が滲む。

目蓋は腫れ上がっているかのように熱く、頬の上を水っぱいものがとめどなく滴り落ちていく感触。

泣いているのだと気づいた。

一度でもいい。

父に、母と妹に、自分を見て欲しかった。

絵に描いたものじゃない、本当の笑顔で笑いかけて欲しかった。そう思うのは、間違っていたのだろうか。

自分には過ぎた願いだったのだろうか。

……分らない。

詩歌は抱いている肩を更に抱き締めた。

強く、強く、肌に爪が食い込むまで。このまま、好きでも

ない人と結婚して生きていく。あるかどうか分からない希望

にすがって、『悲劇』や『惨劇』を描き続けて。

限界だった。

度重なる落胆に疲弊して傷だらけの心が、精一杯気丈に振る舞っていた心が、砂の城を蹴飛ばしたように崩れていく。

痩せ我慢で塗り固めた心は、砂上の楼閣でしかなかった。

不意に、来客を知らせる甲高い電子音が鳴り響く。

失意に暮れていた詩歌は最初のうち、気づきもしなかった。

しかし繰り返し鳴らされていると漸く気づく。

緩慢な動きで立ち上がり、よたよたと玄関に向かう。

一体何の悪戯だ、と思った。

予定していた画材の配達は無き行われた。ただし、

やたらと高張る不審物も込みで。

「……何、これ」

画材の荷をほどくのも忘れ、不審物に貼られた配達明細を記載しているラベルへ飛びついた。

宛名、おりぐら　しいか織倉詩歌。
住所、ここ。

宛名は間違っていない。

差出人、内容物、不明。　警告、天地無用。

これで明細とは片腹痛い。

詩歌は至極真つ当な感想を抱いた。

「……とりあえずどうしよう」

字面にすると狼狽しているようでいて、実際、あまり動じていなかった。

開けずに警察へ届け出るのが賢明だと分かっているからだ。

何事かで恨みを買って危険物が送られたのかもしれないし、こんな愉快な悪戯で楽しませてくれる知人は残念ながら思い当たらない。

とは言え、今すぐにどうこうしないといけないものではない、と詩歌は判断した。

今の時代、宅配物について宅配業者の監査はとんでもなく厳しい。

そのため、爆発物だろうが何だろうが中を開けずとも見抜いてしまうのだ。

加えて立場上、専属の警備業者とも契約を交わし、配達されるものに異状がないか二重の監査が入ったのち、警備員によって届けられるのでまず危険を回避できる。

理想としては、不審物を自分の手元まで届かせないで欲しい。が、詩歌には便宜上、差出人不明の荷物を定期的に受け取らな

くてはならない事情があつた。

单身、実家から離れたところで暮らしている、妹の身の回りを調査した書類だ。

この荷物を受け取った時　いや、今もずっと、誰かと話すのが億劫だったので、ろくに確認もせず、予期しない差出人不明の荷物を受け取ってしまった。

……まあいい。

詩歌は不審物を放置し、丁重に包装された画材の箱を開く。

中身に過不足はないようだ。

早速取り出して作業に取りかかる、ことはしない。

全くと言っていいほど、描こうとする気が起こらなかった。

ここ数年、何かに追い立てられるように絵を描かなければいけないと感じていたのに。

あの不審物を開けてしまおうか。

気づけば、そんなことを考えていた。

迂闊なことこの上ないが、何かで気を紛らわしたかった。

もしかすると、自分の人生に幕を引く勇氣は持てないから、不慮の事故を期待しているのかもしれない。

思考を巡らせば巡らすほどに気持ちが悪く。

開けてしまおう。

暗澹と渦巻く感情に誘われるまま、詩歌は不審物のビニールテープを外していく。

大きな箱だ。

高さは百六十センチほどある詩歌の膝上まであり、幅も肩幅より広い。

外開きの上蓋に手をかける。

中に入っていたのは、奇怪なオブジェを連想させる機器類と、一枚の紙切れだった。

お馴染みのぶちつと潰す緩衝材に梱包されている機器類は一先ず放っておき、紙切れを手に取る。

『エーリュシオンモジュール・R 起動プロセス』

A4サイズとおぼしき用紙の頭には印字体でそう書かれていた。そこで改行されており、次の行からは起動手順らしい。

起動手順の部分を斜め読みして脇に置いておく。

次に、機器から梱包する緩衝材を取り外す。

見ればみるほど、不気味な形状だ。

記憶の片隅に引っ掛かるものを感じるのだが、何かは分からない。

得体の知れない機械をあれこれ弄るのも憚られ、ならどうしたものかと思案を巡らす。

CCIで調べるのはどうだろうか。

ふと、レギンスのポケットにある膨らみへ目がいく。

手をつ突っ込んで取り出すと、二十一世紀序盤で人気を博したと言われる、スマートフォンほどの小さな機体が出てきた。

CCI。

今急速に普及している、次世代のマルチメディアプレイヤーに付けられた総称だ。

正式名称は英訳で『The Computer has a function is Carry out in a operation infinitely』。

日本語に直すと『際限なく演算する機能を持つ電算機』の意を表す。

俗称のCCIは『Computer』『Carry』『Inf

initely』の頭文字から取っている。

旧来のマルチメディアプレイヤーとは一線を描く性能は、携行できるタイプですらかつてのスーパーコンピュータに匹敵し、加えてある画期的な機能を持つ。

現代では携帯の電話機としての役割も果たしているそれを操作し、手際よく検索ワードを打ち込んでいく。

検索ワードは『エーリュシオンモジュール』。

薄っぺらい餅のような形をしたC C Iから、賞状額ほどの立体ウィンドウが浮かび上がり、虚空に投射された。

詩歌の顔に緊張が走る。C C Iを握り締めた左手に手汗が滲むのを感じながら、固唾を飲む。

緊張からか、いつもと比べ少し長めに思える時間をかけて、立体ウィンドウが結果を示す。

検索の結果、ヒット数七十八件。

思いがけず、多くかかったものだとほくそ笑む。

だが懸念も浮かぶ。

この中に幾つ関連するものがあるだろうか。

見るからに疑わしいものは省き、一つずつ目を通していく。

「……ない」

困った、と重い息を吐き出す。

先程まであった淡い期待は微塵も残さず打ち砕かれていた。

他に目ぼしい単語がないか思索してみるが、思い浮かばない。

早々に手詰まりとなってしまった調べもの。……いや、こ

れでよかったじゃないか。

自分がすべきことは、酔狂にうつつを抜かすことじゃなく、父をも唸らせる結果を示すことだろう？

自分に問いかける。

そうだ、こんなことは無意味だ。必要ない。

さつきは結婚の話が聞かされて無様に動揺し、あまつさえ弱音を吐く脆弱さに呑み込まれかけてしまったけれど、まだ終わらせない。

終わりたいくないのだ。

痩せ我慢で塗り固めた砂上の楼閣は決壊してしまったけど、もう一度作り直す。

誘惑に弱く我慢強くもない自分は、いつかまた挫けてしまうだろう。

だけど、諦めない。

挫けるたびに砂上の楼閣を作り上げ、そして、いつか、いつかきつと。

そうすれば、きつと見たこともない世界が見えてくる……。

そんなこと、続けてられるはずない。

心のどこかが囁く。

うるさいうるさい、黙れ。

心のどこかから込み上げてくる辛い気持ちに蓋をして、こんなものは知らないと突っぱねる。

すぐに首を出そうとする葛藤を、詩歌はやつとの思いで落ち着け 唐突に閃いた。

「あ……」

瞳孔の開いた目が、箱から出して置きっぱなしにしていた謎の機器類を映す。

思い出した。

あの奇怪な造形、『ミリアネスの涙』だ。

二十世紀末にその名を轟かせた奇才、工芸家アドリアーネ・フィオレンティーナの遺作。

それとあの機器類は、色から形から瓜二つである。

あの形のどこが涙なのか。

涙は何かの隠語を表しているのかもしれないし、自分には及びもつかない考えがあれを涙と判じているのかもしれない。

ただ、美術史には資料以上の価値を見出だせなかったし、興味は持てなかった。

美術家の端くれである自分が、高名な美術家の遺作に頓着しないのは心構えがなっていないと言われるかもしれないが、自分にとって芸術は『手段』だ。

興味というものを無理して抱くのは、人間関係を円滑に進める時だけでいい。とにかく、あの機器類が『ミリアネスの涙』と酷似した造形だということは分かった。

調べる？

脳裏によぎった言葉を反芻する。

目的ある自分に寄り道は時間の浪費でしかない、が、調べるくらい大したロスではない。

気になって意識を中空に飛ばすくらいなら、幾ばくかの時間で調べて疑問を解消した方が効率的ではないか。

暫しの逡巡を挟み 調べることに決めた。

手早くC C Iを動かし、検索エンジンを開く。

検索ワードは『ミリアネスの涙』 『エーリュシオンモジュール』

。

再び立体ウィンドウが姿を現す。

機器や機械、といった単語を入れようか迷ったが、正直言つてあのミリアネスの涙もどきが、機械の類いだと確信を持てなくなっていた。

鉄色の合金くろがねが与える無骨な印象に機械だと判じたが、もしかしたら単なる工芸品かもしれない。

そうすると 。

検索を行うC C Iの傍ら、手隙に色々なことを考えていると、いつの間にか検索は終わっていた。

検索の結果に目を走らせる。

検索の結果、ヒット数二十五万三千百十二件。

少しの間、自失した。

目を睜^{みは}って硬直したまま、予想の斜め上に行くヒット数に意識が縫い付けられる。

エーリュシオンモジュールで七十八件だったことを考えると、この多さは『ミリアネスの涙』の仕業ということだ。

ミリアネスの涙は有名だし、or 検索を使っているから、恐らくはそういうことだろう。

疑問に一先ずの理屈をつけ落ち着いたところで、検索結果の身を吟味していく。

これだけ調べる候補が多いと、有意の抽出にも骨を折らなければならぬ。

流石に全て調べ通すなんて時間の浪費は許しがたいので、少しして成果が上がらなければすっぱりと諦めよう。

心に決めて取りかかる。

数分後、気になるものを見つけ出した。

『電子世界公式情報サービス』

名前よりも、名前の横に示された印章 『身元証明印』が興味を引いた。

今の時代、諸業務の大半を一手に引き受けるのは、統制された機械。

人件費の削減、諸経費のコスト低減などといった利点と引き換えに、雇用を減らしてしまったが今では概ね受け入れられている。

『身元証明印』は、そんな諸業務の機械化を受けて、急速に広まった身元詐称を防ぐ措置だ。

ネット上で行われる取引、というのは昔からさして珍しくなかった。

だが現在主流となる手法では、取り仕切るのは人間でも、実行

するのは機械なのだ。

その機械をだまくらかす。家庭に普及する程度の高性能ＣＣＩでは出来なくとも、企業が採用するような群を抜いた性能のＣＣＩならば、決して不可能なことではなかった。

事態を重く見た公正取引委員会と国家公安委員会は、協議の結果、身元証明する印章を発行し、機械がそこで判別出来るように取り計らう。

そうして誕生したのが、今気になっている印章だ。

これは機械に限らず、一般人が日常生活で騙されないよう、相手を識別する基準でもある。

印章があるということは、少なくとも身元を開示しているということ。

詩歌は印章をＣＣＩに読み取らせ、それが何処のものであるかを確かめた。

「ウォーリーテック社……？」

反芻するように印章が証明している身元を声に出す。

二十二世紀終盤に誕生した新興国発祥の企業、家電量販店の経営や用途別各種ＣＣＩの販売・開発のみならず、ハードウェア・ソフトウェア業界でも最大手の一つ、加えて不祥事らしい不祥事をほとんど起こさない、信用性という点でも業界随一の企業、といった知識が頭を掠めていく。

本当ならば、というか現在に至るまで印章の偽造が指摘されたという話を聞かないので、相当に信用の置ける相手だ。

偽造が表沙汰になっていないだけかもしれないが、そこまで疑心の目を光らせることもない。

早速『電子世界公式情報サービス』を覗くべく、クリックボタンを押す。すると、

『このページはウォーリーテック社が提供する、エーリュシオンモ

ジュールの情報サービスです。』

ウォーリーテック社がエーリュシオンモジュールを提供しているのか、ウォーリーテック社は情報を提供しているだけなのか。

判断のつかない文面だが、読み進めていく。

『エーリュシオンモジュールは、かの天才工芸家・アドリアーネ・フィオレンティーナの遺作「ミリアネスの涙」をモチーフとした造形の、全感覚流入型仮想体験機器となっております』

『使用者の皆様を古代西洋に一部則した世界へといざない、仮想の世界をお楽しみ頂けます。

そこで皆様は、見たこともない「新しい世界」を体験することになるでしょう。』

『仮想体験している間、現実の肉体は動かさませんので、必ず安全な場所でご使用下さい。』

『仮想の世界内での時間経過は現実と同様です。

使用する時は必ず、時間の経過にご留意下さい。

安全には万全を期しておりますが、万が一異常が見られた場合、すぐに脳外科医師の診断を受けて下さい。

仮想体験での安全保守義務は法律で保障されておりますので、問題が発生した場合には下記番号かアドレス、またはウォーリーテック社に直接お越し下さるよう、お願い申し上げます。』 『仮想体験での死傷は現実には一切影響しません。痛みの感覚は99%カットされ、痛みを除くものは完全に近い精度で再現されます』

『このエーリュシオンモジュールで体験するものは全て仮想のもです。

現実と混同してしまわないよう、くれぐれもご注意下さい。』

サイトのあちらこちらから情報を集め、そのまま書き記したのが上記の文面だ。

このエーリュシオンモジュールについて、おおよその理解が得られた。

ただ、今手元にある機器が本当にエーリュシオンモジュールで

あるか、不安だったのでサイト上の紹介写真と見比べていた。

そこで、手元の機器に例の印章を発見した為、C C Iで読み取ると確かにウオーリーテック社のもの。

安心した。

そして、仄かな期待が胸に生まれていた。

「新しい、世界……」

使い古された表現だ。

ともすれば、陳腐にも感じてしまうくらい。

だが、口ずさむその声は上擦ってしまう。

心がその謳い文句に惹かれてしまっていた。

絵を描かないといけない、父に、母と妹に認められたい。

その気持ちは今も変わらない。

しかし、その先に今までとは違った世界を望んでいるからこそ、
だ。

エーリュシオンモジュールが見せる『新しい世界』というものが、
自分の望むものだとは限らない。

いや、仮想であり偽物であると銘打っている点で、既に見込み
は限りなく低いだろう。

……偽物は嫌いだ。

それでも、僅かな、本当に僅かな可能性に、心は浮き立ってい
た。

また、性懲りもなく『偽物』に浸るのか。

理性が侮蔑を交えた罵倒を飛ばす。

だが、感情はそれでも歯止めを受け付けず、詩歌に手を伸ばさ
せていた。

エーリュシオンモジュール。

仮想の世界に逃げ込む機械へと。

第一章“幸せの絵画”三話

「おう嬢ちゃん、今日も早いね！　元氣かい？」

胸間声ではきはきと話しかけてくる声に立ち止まり、声がした方へ振り向く。

そこにいたのは髭面の顔馴染み。

市場に構えている、彼が商う八百屋の店先を背にして、いかにも壮健そうな顔を見せている。

「うん、元氣だよ。おじさんも元氣そうだね」

「あつたぼうよ！　俺から元氣を取ったら何も残りやしねえ！」

ガハハ、と豪快に笑う声に、愛想笑いを返す。

夜が明けてまだ間もない市場は、活気に乏しく随分と静かだから、彼の声はよく響いた。

朝の澄んだ空気も、真冬に付き物の身を切るような寒さの前には楽しめず、手がかじかむばかりだ。

話を打ち切ってしまうのは忍びないけど切り出す。

「ごめんおじさん、早く終わらせたいからボク行くね」

「……おっと、そいつはわりい。こんな寒いで立ち往生は地獄だからなあ。頑張れよ！」

不自然な間が空いた激励を受ける。

「おじさんも店番頑張つてね」と返すと、彼は猛烈に嫌そうな顔をした。

「俺も早く中に入って暖炉であつたまりてえぜ……」

「あはは、サボったら奥さんに怒られるよ」

愚痴る彼に釘を刺す。

彼は可哀想なくらい気落ちしていた。

「……それはそうとよ」

けれど、突然彼の様子が一変する。

打って変わって真剣味を帯びた顔と声。

彼の言わんとすることは分かっていた。

「あの森は危険な動物なんかはいねえが、とにかく迷いやすいんだ。遭難したら洒落にならん。」

……嬢ちゃんは何なんかわかりよっぽど森の地理を知悉してるだろうし、今まで上手くやってこれたかもしれないが、絶対迷わない保証はねえ。盗賊だつて出ないとは限らねえんだ。それに――

「ごめん！　ボク急ぐから！」

「あつ！　おい！」

言い募ろうと手を伸ばしてくる姿を尻目に駆け出す。

そして、市場が見えなくなったところで徒歩に戻した。

前方には街の外へと繋がる堅牢な門、左右を藁葺き屋根の家に取り囲まれて、青い空を仰ぐ。

溜め息を零した。

このまま、近くの森まで出向いて《宝珠

》の材料となる、結晶シェリエを採取しないといけない。

片親だったボクは早くにその片親も亡くし、自立して生計を立てる必要に迫られた。

宝珠調合師の適性があってよかったと思う。

右手首を頭の高さにまで振り上げ、身に付けている腕輪を見やる。

鮮血のように赤い《宝珠》が嵌め込まれた、青銅の腕輪。陽の光を受けてきらりと光った。

《宝珠》は、森羅万象の源。

自然界から引き出された力は摂理の網を潜り抜け、現象界に相を移す。

その力は家の明かりに、怪我を治すことに、神様と戦うことに使われる。生きるにも争うにも不可欠なものだし、そのお陰でボクは生計を立てていける。

知る限りでは、みなしごなんてそう珍しいものじゃない。

そういう子供は通例、国の運営する孤児院に引き取られて、行く行くは兵隊や女中にされてしまうのだ。

女中ならまだしも、痛いのも怖いのも嫌いだから、独り立ちできてよかったと思う。

あまり無為に時間を潰すのも何なので、門に向かって歩き出す。職業柄、お互いすっきり見慣れてしまった門番と挨拶を交わし、街道に出た。

緑豊かな景観。

厚手のブーツで土を踏みしめて進む。

人の行き来が盛んなこともあって、歩きやすいよう整備された道だ。　　といっても、土を慣らして小石や雑草が取り除かれているくらいだけど。

不意に、寒風が吹き荒ぶ。

堪らず手を擦り合わせ、吐息で暖める。

……寒い。

そういえばもうすぐニズヘグの祝祭だな、と埒もないことを思い出す。

その日はお祭り騒ぎで右も左も分からないほど街が沸いて、そ

して各々の思う大切な人へとものを贈るのだ。

だけど今年も、一番大切な人から贈り物はもらえそうにない。

だって、一番大切な人なんていないから。

*

森の中を歩いていた。

街の近くにある森は草木が鬱蒼と生い茂り、さながら樹海のよう
に広がっている。方角を指し示す道具と、地理に通ずる知識

をある程度持たなければ、延々と続く迷路のような惑わしに容易く
騙されかねない。

周辺の民からは『迷いの森』と呼ばれ、そうそう人の寄りつか
ないそこを、知り尽くした庭であるかのように進む。

時折草藪を掻き分け、衣服や髪に若緑の葉っぱをつけながらも、
着実に目的地へと迫っていく。

入って四半刻もすると、最短距離で目的地 ミリアネスの涙
に辿り着いた。

だけど、目的地を前にして、先客の存在に気がつく。
鼓動が跳ね上がった。

まさか国軍の関係者か。

警戒レベルを一気に引き上げて けれど、先客の容姿を見た
途端拍子抜けする。

若い男とその娘くらいの女の子の二人組だ。

街でよく見かける麻の衣服を重ね着した男と、真っ白いワンピースに
ファーコートを羽織った女の子。

国軍にしてはあまりに不自然な組み合わせ。

子連れのピクニックには、場所が些か不釣り合いだけど。

こちらに気づいたらしく、女の子の方に指を差される。

それで若い男の方も気づいたようだ。

ボクは、幾らか緊張を和らげて話しかけた。

「おや、先客がいるなんて珍しいな。あなた達も結晶^{シェリエ}を？」
「シェリエ？」

同業者あたりかと目星をつけていたのだが、きょとんとされてしまった。

聞き返したのは若い男だけだが、女の子も不思議そうにしている。

「あらら、違うのかな？　だとすると危ないよ。今から《結晶》を集めるから」「危ないの……か？」

そんなことも知らずにここへ来たのか。

いまいちピンと来ていない様子の男に「そうだよ。だからちよつとの間、ここから離れててね」やんわりと退去を促す。

「《結晶》を採取する時はね、ある程度離れないと酔っっちゃうんだ」

「……へえ」男はそう言って、女の子と一緒に小走りで十メートルほど離れ、手近な草藪にしゃがみこむ。

男の膝丈より少し上、ボクの腰丈くらいにもなる、背の高い草藪だ。

そして草藪の横合いから顔を覗かせ「この辺で大丈夫？」と訊いてきた。

「それくらい離れば大丈夫かな」

「遮蔽物もあるし」と付け足し、お墨付きを出す。

男が女の子と何事か話すようにしているのを目尻の端で捉えつ

つ、ボクはミリアネスの涙に向かって手のひらを突き出した。

我ながら生っ白くて頼りない太さの両腕が虚空で止まり、真っ青な水晶で形作られた樹木と大人一人分の距離を保つ。

材質が水晶のようである以外は、周りの木と何ら変わらない見た目の樹木　これがミリアネスの涙だ。

そして　。

「へえ、道に迷ってたんだね」

街へと帰る道中。

無事に《結晶》の採取を終えたあと、ボクは先程出会った二人組と行動を共にしていた。

警戒は緩めていない、つもり。　一見して盗みを働くようには見えないけど、ろくに知りもしない人を根拠なく信用するのは危険だ。

これはこの界隈のみならず、概して言える当然の心がけ。

……実のところピンと来ていないけど。

「うん、そうなんだ。この子も迷子みたい。中で偶然一緒になって」

男が説明する。

精悍な見た目に反して柔和な喋り方をする人だ。

淡い金色の髪も相まって、優男の印象が強い。

説明に応じて女の子を見ると、彼女は破顔した。

「いやあ、助かりました。あまりにもお腹が減りやがるもんだか

ら、もう少しで狩りの本能に目覚めちまうところでしたよ」

愛らしい見かけによらず、辿々しさとは無縁の喋り方だった。
少々面食らいながらも「そ、そうなんだ」と返す。

可愛いものは普通の女の子程度に好きだけど……何となく、肩透かしを食らった気分だ。

「こっちの金髪さんが『お嬢さん、僕と一緒にワルツを踊りませんか』って言いやがるもんですから」

「いや言ってないけど」

「あたしは『森のワルツって訳ですかい、それじゃあ一曲洒落込みましよう』って、ずーっと踊りくさってたんですよ」

途中で男が異論を挟んだけど、女の子は一顧だにせず喋り続ける。

男に視線を移すと「踊ってない」と目で訴えていた。

まあ、それはそうだろう。

「にしても無用心だね。どうして森に入ったの？」

「ふふーん、よくぞ聞いてくれやがりました、娘さん」

得意気に鼻を鳴らす女の子。

この子に娘さんと言われると凄く違和感がある。

両手を腰に当て、背の半ばまで伸びた桃色の髪を歩くたびに揺らす姿は、ボクより余程娘さんらしい。

揺れる髪を男はまじまじと見て「人間の髪が持つ色素は赤と黄と茶だったような……」とか「……いや、近年発見された青の色素と混ぜ合わせて……」などと、不可解そうに呟いていたが、時折意味を汲み取れない単語があった。

彼は学者でもしているのだろうか。 なんて考えていると、
女の子の声に意識を引き戻される。

「あたしの目的はズバリ、世界征服！」

高らかな宣言に合わせてどこからともなく林檎を取り出し、ガ
リツとかじる。

「むしゃむしゃ……それでね、世界を果物で埋め尽くしてやる訳で
すよ。朝食に林檎、昼食に林檎、夕食も林檎。家は巨大林檎をくり
貫いて作って、教会からは林檎教信者を輩出。

太陽と月も、そのうち林檎に取って代わっちまうことでしょう。
ほら、太陽も林檎も似たようなもんですし」

「どうして林檎限定なの？」

「今あたしのマイブームが林檎なので」

長々と自説を語る彼女は、とてもいきいきとしていた。
ぱつちりとした大きな瞳を輝かせている。

何だかメルヘンチックな話だ。

ただ林檎教信者は、マイブームが変わる度に改宗を強いられ
るのだろうか。

太陽と林檎が似てるっていうのは、赤いところと丸っぽい点で？
人類の希望のために、彼女の夢が叶わないことを祈ろう。

悦に浸っているのか、ほんのりと頬を赤らめてうっとりしてい
る女の子。

それを見て、ボクは『家になるような巨大林檎は実在しないん
だよ』という言葉を胸に秘めた。

何だか口になると、出てきてしまいそうな予感に駆られたから
だ。

「それで、そつちの人は？」

壮大な夢物語はさらりと流して、男に尋ねる。
男の顔が強張った。

「何か見慣れないものがこの森に入っていくのを見かけたんだ。それで気になって……」

「ついつい追いかけてきちゃったってわけか」

随分と間拔けたことをするもんだ、と思った。

蝶々を追っかけて迷子になる子供と同じレベルだ。

呆れてものも言えない、といった表情で見てやると、彼は痛いところを突かれたように情けない顔をする。

自覚があるようで何より。

「はあ……。迷子を心配された日に迷子二人を助けるなんて、いい皮肉だよ」

「その、……申し訳ない。ありがとう」

「厄介事に巻き込みまっすいません。彼とあたしからの気持ちってことで、つまらないもんですが……」

「果物はいいよ」

差し出された果物は即座にお引き取り願って「っていうか実質、ボクも普段通り帰るだけだし」と続ける。

「というか、本当にどこから果物を出してるんだろっ。」

簡素なワンピースやラビットファーコートに、不自然な膨らみは見受けられない。

「それよりも君達はもうめったなことじゃ森に近づかないこと。いい？」

あなた、という他所行きの二人称から打ち解けたものに変えて話す。

警戒を解いた訳ではないけど、遠慮して話す必要もないと判断した。

これくらいの態度は助けたお礼として許して欲しい。素直に頷く二人。

そうだ、行きがけの駄賃にあれも教えておこつ。

「ついでに《結晶》とミリアネスの涙についても教えておくよ。宝珠調合士として、宝珠絡みの事故は防ぎたいからね」

「ミリアネスの涙？」

ミリアネスの涙と聞いた瞬間、男が怪訝そうに眉をひそめる。

「ミリアネスの涙がどうかしたの？」

「……いや、何でもない」

ボクは顔に疑問符を浮かべた。

何かで聞き覚えがあったのだろうか。

まあ《宝珠》ばかり有名だから、《結晶》やミリアネスの涙をそれと知らずに、名前だけ聞き及んでいても不思議じゃない。

「まあそれでね、《結晶》っていうのは《宝珠》を作るのに必要な材料で、ミリアネスの涙は《結晶》を作るのに必要な力が集まる場所なんだ」

これは恐ろしく簡単に済ませた説明だ。

けど、彼らは学者でもなければ宝珠調合士でもない。

万一学者だとしても、危険性だけ話しておけば十分だろう。

静聴している二人を見て決める。

「何が危ないかって言うと、まずミリアネスの涙から《結晶》を採取する時が危ないんだ」

前に出す足の邪魔にならないよう、太股でぱつくりと左右に生地が割れた踝丈のウルコートから、採取したばかりの《結晶》を取り出す。

手に取ったものは細かい意匠が施された銀盤だけど、この中に《結晶》が込められている。

「ミリアネスの涙に眠る、凝縮された自然の力が《結晶》なんだけど、ミリアネスの涙は普段休眠してて力を引き出せない。そこを無理矢理起こしちゃうわけだから、驚いて四方八方に《結晶》の欠片とも言ふべき力を振り撒いちゃう。

その力に触れても怪我はしないけど、気分が異常に高揚して二日酔いみたく頭痛や吐き気、酩酊感に襲われる。

でも、耐性が特別弱かったりすると、最悪昏倒する場合だってあるから。油断しちゃダメだよ。

今のでわかったかな？」

「大体。だけど、あなたは大丈夫なの……か？」

「宝珠調合士になれる人は、そういう力を操る適性があつて、皆ある程度耐性を持つんだ。大丈夫だよ」

男の質問に答えて、一呼吸置く。

「《結晶》に落ち着けた力は無害だけど、依り代になつて銀盤が壊れると、やっぱり四方八方飛び散っちゃう。一応言っておくと、《宝珠》は壊れても飛び散らないから大丈夫だよ」

《宝珠》は日常生活で壊れるのを目にしたこともあるだろうけど。

一応捕捉しておく。

そして、間に質問を一つ挟んだ以外は、終始聞き手に徹してくれていた二人に「説明おわりっ」と笑いかけた。

「ありがとう。お陰で助かったよ」

「いい話を聞かせてもらいました。お礼にこれを」

「いりません」

「けっ、背教者が」

果物を受け取ってもらえなくて不貞腐れる女の子。

……冷たくしすぎだろうか。

どうにも子供と話している気がしないから、つついそれなりの反応をしよう。

「ところで、あなたはホウジュを作る仕事をしているの……か？」

「そうだよ。大抵委託販売だから親しみないかな、宝珠調合士は《宝珠》を作る仕事だよ」

男はふむふむと頷く。

「わたし……オレはこの通り無学だから、ホウジュ調合士の考えるホウジュっていうのを一度聞いてみたい。いいかな？」

確かに、一般人の間で考えられている認識とボク達のそれとじゃ、少なからず開きがあると思う。

勉強熱心な人だな、と感じて もしかしたら、学者という予想は遠からず当たっているのかも。

例えば学者の子弟だとか。

無学だと潔く認められるところにも感心して、ボクは持論を語ってみることにした。

「自然から引き出された森羅万象を操る力が秘められた道具　　っ
ていうのが一般的な認識だと思う。」

「ただ《宝珠》に宿る力は、自然っていう一つの世界に漠然と漂う力を引き出して、現象になるための力に変換したものなんじゃないかな、って……ちょっと考えすぎかな？」

「……いや、正しいか正しくないかはわからないけど、そうだとし
てもおかしくない気はする」

以前話した同業者には良い顔をされなかった話だけど、彼は内
容をよく吟味してくれているようだ。

前の人には途中で「そんなはずない」とにべもなく切り捨てら
れてしまった。

だからか、真剣に聞いてくれることが少し嬉しい。

心持ち足取りが軽くなって、ボクは私情を挟んだ言葉も言うて
みる。

「《宝珠》は色んなことに使われるけど、暮らしに役立てられるも
のは心なしか、《宝珠》の効力が強まってるみたいに感じる時があ
るんだ。《宝珠》が喜んでるみたいで、ボクも嬉しい」

効力の強まり云々はそうあって欲しいっていう、ボクの願望か
もしれないけど。

でも、争いに使われる《宝珠》が時折謎の暴発を起こすってい
うのは、同業者間で周知の事実だ。

ボクは、《宝珠》の意思というものを信じていたい。

照れ臭いけど面と向かって話すボクに、彼はほっと息をつくよ
うに微笑んだ。

「っ
」

息を呑む。

綺麗に笑う人だな、と思った。

微笑む彼の顔は、そこだけ別世界であるかのように透き通って見えた。

儚いんじゃないくて、印象深い繊細さ。

そこにある確かな存在感がボクの目を奪っていた。

彼は一体、何に微笑んだんだろう。

ぐるぐると思考を回して。

現実から意識が剥離しかけた瞬間、思考は遮られた。

「話は終わっちゃいましたかね……？」

じめじめとした視線を向けられ、はっとする。

……あれ、あの子ってさっきまでの女の子だよね？

ボクは目を^{みは}瞠った。

見るからに元気をなくしていて、どんよりとした黒い雲を頭の上に幻視した。

これはちよっと、異様な落ち込みぶりじゃないだろうか。

女の子は、抑揚のない声と虚ろな目で暫くボク達を困惑させたが、やがて先程の調子を取り戻す。

澁刺と振る舞う彼女に訊いてみた。

「さっきはどうしたの？」

「果物ですよ。さっきの雰囲気じゃ林檎をシャクシャク噛むのは気が引けちゃいましたね。あたし、果物が動力源なんで」

「別に音なんて気にしなくても……。何なら、音の立ちにくい果物にすればよかったんじゃない？」

「……。今は林檎しか食べたくないんですよ。他の果物とは倦怠期
ってやつです」

妙な間と謎めいた言い回しが気になった。
けど、あれこれ追及するのも憚られて、結局は触れないことに
した。

男も同じ結論に達したようだ。
そして、遂に森の出口が見えてきた。

「ボクはこのまま街に帰るけど、二人はどうするの？」

「あたしはここらでお暇します」

「……オレもここで別れるよ」

二人の返答を聞いて、ボクは少しだけ残念に思った。
奇妙なところのある彼らだけど、好感が持てたのに。
それでもその感傷はすぐにおさまった。

「ああ、そういえばお名前を伺っても？」

女の子が思い出したようにポンと手を叩き、訊いてくる。
触れないように努めていたことを訊かれ、ドキリとした。

……とは言え、自分勝手な配慮からの行動だ。 訊かれたか
らには答えないのもおかしいだろう。

ふと、自分に対する言い訳を考えている自分に気づいて、嫌に
なる。

「ちなみにあたしはティア」という声が聞こえ、覚悟を決めた。

「ボクはミーシェ」

「……オレはシー」

全員の名乗りが終わり、ボク達は別れを済ます。

一握りの寂寥。せきりよう

だけど、彼らと数日後にはったり出会って、付き合いが続くことになる。

第一章“幸せの絵画”四話

「じゃあ、次はこれ客室に敷いてくれ」
「はい」

厳つい顔をした年配の男性から白いベッドシーツを手渡され、
シーはぎしぎしと軋む階段をのぼった。

ここは大陸南方に位置する港街、ミルキー。
ママの味ではなく潮の香りがする街に軒を連ねる、平凡な宿屋だ。

シーはそこで臨時の従業員をしていた。

「よし、終わった」

ベッドメイキングの完了を伝えると、先程の男 宿屋の主人
から夕方までの休憩を言い渡された。

ガラスが張られていない窓から、男のものへと変貌した顔を出す
と、太陽はまだ中天にかかったばかり。

二時間から三時間ほどの猶予があると分かり、出かけることに
決めた。

どうにも、男の真似は慣れないな。身体を動かすだけでも
一苦労だ。

寒々とした外気に身体を震わせながら、シーはここ何週間かばかりの
出来事を思い返す。

彼の名前は現実で『織倉詩歌』。

エーリュシオンモジュールを起動させてこの世界に訪れた、十二歳
の女性だ。

市販されている、顎まですっぽりと覆うヴァーチャル・リアリ

ティ用の機器を被り、いざ起動させる段になると一つだけ任意で設定が可能な項目に気づいた。

それは性別。

通常、ヴァーチャル・リアリティにおいては、フルフェイスマスクのような機器が脳と表皮から外見情報を読み取り、現実にも似た姿となる。

体格を変えてしまうと、肉体の操作感覚がまるで違ってくるから、というのが大きな理由の一つ。

ゲーム、という分野に限っては外見情報がある程度変更できたり、用意された外見を選ぶ場合もあるようだが。

詩歌は豊かな学識を持つものの、ゲームに対する造詣が深いくない。

そのため、容姿どころか性別を変える設定項目に面食らった。しかし、同時に思う。

偽物に浸るなら仮の姿である方が都合だと。

ここでの営みと現実のそれを切り離して考える、という試みは功を奏した。

ここで心のデトックスを図ったあとでの作業効率は、格段に上がった。

ただただ労苦でしかなかった作品を仕上げる作業にも、以前同様、手段と割り切って勤しめるようになったのだ。

しかし、幾つかの疑念が浮かぶ。

この世界の、この世界に住む生命の何が仮想なのか、と。

情報サービスはすべて仮想だと結論付けている。

第一に思いついたのは人工知能。俗に言うAIだ。

最先端の工学を駆使して導かれる、人間が当たり前持つ意識の再現。

言語的知能、数学的知能、空間的知能といった前頭前野に関わる一般知能と呼ばれるものや、記憶の蓄積と引用、目的と状況とを

勘案して問題に対処する能力。 物事を論理的に捉え、経験や繰り返して学習したり、根源的に人が抱く欲求 所謂本能。

更には、人間が暗黙に持つ常識と心理学の領域における創造性や性格、そして音楽的能力に運動的能力。

果ては、経験と状況、性格に応じた感情の表出に至るまで。

それら一連の人間的能力を、機能として搭載した人工知能であれば、人と遜色ない振る舞いにも領ける。

が、とても現実的とは思えない。

一つ当たり数億円は下らないと言われる、膨大なコスト。

加えて、それは人工知能に限った話だ。

容器である素体のコストは。 そもそも、人工知能と素体を連動させた上で、生命活動を正常に行う技術など確立されていないにも関わらず、適度な間隔で脈打つ手首や血液の循環を思わせる生温かい肌、鼻から空気を吸入し排出する、といった生命活動の特徴がこの世界の彼らには認められる。

なるほど、然るべき設備、然るべき装置、然るべき素体があれば、いずれも擬似的に再現できるかもしれない。

しかし彼らは人間サイズの素体で、据え置いた装置の補助も受けずに、日常生活を営んでいるのだ。

そんな生命が、本当に作り物なのだろうか。

すぐ傍を、漁師然とした筋骨逞しい男が通り過ぎていく。

きびきびと歩く生気に満ち溢れたその姿に、シー扮する詩歌は複雑そうに顔をしかめた。

他にも疑問点はある。

情報サービス含むウェブ上で得た情報。

それによると、詩歌以外にも使用者はいるらしい。

使用者が書いたという批評や感想、巨大掲示板での使用者同士による雑談や議論を、起動する前に閲覧したのだ。

使用者同士は半径五メートル以内に近づいた際、初回限り電子音声の案内によって伝えられる、と情報サービスにはあった。

音声が届こえるのは使用者だけ。

最初の一回限りというのに引つ掛かる。

だが、こちらで眠ったり気絶したことはない。

使用者には未だ会っていないはずだ。それよりも、おかしいのはマスメディアに取り沙汰されないこと。

流行に疎い詩歌と言えど、ニュース番組や新聞の類いはたしなむ。拔群と言っても良い話題性、使用者という情報源、ウェブ上に公開された情報。

これだけの条件が揃っておきながら、詩歌は一度も、件の機器絡みの報道を見ていなかった。

偶然見逃しているだけなのか、それとも別の理由か。

他の使用者の入手経路も不明だ。

故意か偶意か、その手の話題は口にされない。

交わされる議論と言えば仮想世界内での暮らしと、独特の概念や存在に関することが大半を占めている。

ならば、自分から疑問を提起するか、あるいは報道機関にでも伝えてみるか？

……どちらも悪い事態を招きそうだ、という予感慎重になり過ぎていくせいだろうか。また、この案件が明るみに出れば、件の機器を取り上げられてしまうかもしれない。

後者の可能性に怯えている自分に気づき、詩歌は内心愕然とした。

情報サービスの言に従えば、今まで接してきた人達はすべて、作り物だ。

ぶつきらばうな宿屋の主人も、やたらとドジを踏む給士も、そしてあの二人も。

現実と空想を切り離し、混同しないようにする試みは上手くいつている。

だが、崩れかねない均衡でもあることに、詩歌は思い至った。
この世界は思った以上に、いや、危ないほどに詩歌の望むものを満たしていた。

なぜなら、詩歌はここでなら『織倉』ではなくなる。

本物と見紛う人形達に『シー』として、迫真のままごとに興じていられる。

絵に描いた幸福とは違う、匂いも手触りもある偽物。

自分の想像を超えてくれる偽物。

それは本物に近い価値があるように思えた。

それを無意識に感じ取っていたからこそ、あの時の自分は『シー』などという名前を付けたのだ。

取り込まれてしまうことを恐れて。

『しいちゃん』

雑踏の只中で目蓋を閉じ、その裏に過ぎ去った幸せな光景を映す。

日本人形のような、黒いおかつぱ頭の女の子。妹。

脳裏に焼きつく懐かしい声が蘇った。

街中の喧騒が遠ざかっていく。

広い座敷にちよこんと座った小学校低学年頃の妹。

その顔は墨が滲んだようにぼやけている。

あの頃、妹はどんな顔をしていただろうか。どんな表情を浮かべていただろうか。

判然としない記憶に、しかし思い出そうとすることはしない。

感傷を振り切るためにぶんぶん頭を振った。

一度、疑問も感傷も忘れよう。

今はこのぬるま湯のようなひとときを楽しんで、深く考えるのはあちらに帰ってからだ。

強引に意識を切り換えたところで、シーは前方に人だかりを認

めた。

このまま進めば一分とかからず着くところにある、どこか工房を連想させる建物の前だ。

道行く人も人だかりに何だ何だと浮き足立っている。

「どうしたんだ？」

建物の前に集まっていた一人に訊く。

敬語は使わない。

日本人としては初対面の相手に敬語を使いたくなるのだが、ここでは逆に不自然なのだそうだ。

公式の場や畏まるべき相手には使っても、それ以外は使わないという感覚。

ちよつとした文化の違いだろう、という違いを楽しむお気楽な思考は、次の瞬間消し飛んだ。

「人死にだよ。ここ最近、立て続けに起きてるんだ」

*

「人死に？」

事件現場に遭遇した翌日、シーはミーシェの自宅を訪れていた。

「……ああ。皆惨い状態で見つかってるそうだ。近くにいた人の話じゃ恐らく……、」

「殺人だろう、って？」

言い淀むシーに、ミーシェは何でもないことのように言葉を継ぐ。

そして傍らにある丸い窓から空を見上げた。

群青の空には雲ひとつ見当たらず、鷺のような雄々しい鳥が青天を優雅に泳いでいる。

「……、驚かないんだ……な」

未だ慣れない男言葉をつつかえながら話すシーにミーシェは、

「そんな珍しがることでもないでしょ？ ……怖い？」

空から視線を外してシーに瞳だけ向ける。

生産の仕事に携わるだけあって、本や器具をしつかり収納した棚が、壁に沿って幾つも並んだ部屋。

中央に置かれた横長の机にも、器具が散乱している。

椅子に腰掛けたミーシェと机を挟んで対面に座っているシー。

気だるげに頬杖を突くミーシェの視線に、彼は暫し考えるような素振りを見せた。

「……どうだろう。少し、怖いかもしれない」

この世界での死や痛みからほぼ解放されている彼にとって、それは答えに窮する質問だ。

自分がどうこうなる、という恐怖はない。

しかし、殺人や略奪、暴行といった出来事も珍しくない日常、というのは空恐ろしく思う。

深刻そうに思い悩むシーを見て、ミーシェは軽く首を竦めた。

「そうなんだ。」

自分や誰かの死に観念してるところがあるからね。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5513z/>

円環パラダイムーThe world which is in a state of fluxー

2011年12月27日22時53分発行